

花冷え

作者：川崎ゆきお

概要：それは自販機でタバコを買っている時に起こった。

花冷え

春先の寒い日だった。

我慢できないが、堪えることはまだできる。

それは自販機でタバコを買っている時に起こった。

武はいつも二つ買う。ボタンを続けて押せば出てくるはずだ。

だがその自販機は出てこなかった。ポツリと一つ落ちただけだ。武は苛立った。それが引き金となり、尿意がかなり起こった。

その前から尿意はあった。だから早く帰ろうと自転車を走らせていたのだ。

ペダルをこいでいる間は、それほどではなかった。緊急性は低かった。少し急げば完全に間に合うはずだった。

しかし、自販機で、これはかなり近いと感じた。やばいと思い、自転車を走らせた。

走っている時は押さえ込まれているのか、大丈夫だった。

しかし、それもつかの間、前方の踏み切りが閉まりかけた。

武は急いだが、間に合わなかった。

自転車を止めると、尿意が襲ってきた。止まるとだめなのだ。

武は体を動かし、散らそうとした。すぐに出るわけではない。頑張れる。

電車がやっと通過した。

武は助かったような気持ちで、ペダルを踏もうとしたが、踏みきりは開かない。もう一台通過するようだ。

武は苛立った。今度はだめかもしれないと思いながらも、必死で耐えた。

通過車両はなかなかこない。

武は立ち小便できる場所を捜し出した。しかし、踏みきりのこちらもあちらも人があふれていた。帰宅時間帯なのだ。

いつも夕食で通っている店を変えたのがいけなかった。別の店は交差点が多く、信号が多いのだ。いつもの道なら、一度求まる事なく一直線で帰れたのだ。

やっと電車が通過した。武は自分を褒めた。よくぞ我慢し、野蛮なことをしなかったと。

踏切を渡り、次の信号を無視して通過した。この前まで信号などなかった交差点なので、歩行者のほとんどは無視して通っていたからだ。

やはり、自転車で走っている時は耐えられるものだ。止まらなければ大丈夫だと、あらためて確信した。

そして家の前にきた時、ピークに達した。

武は自転車のカギもかけずにドアを開け、閉めもしないで、トイレに入った。

チョロリとわずかな尿が出ただけだった。

決して途中で漏らした覚えはないし、パンツも濡れていなかった。

冷えただけか、と武はつぶやいた。

了